

県立高校「未来の学校」構築事業

研究開発最終報告書

実践校種別	学校名
卓越した探究的な学びを推進する高校	野沢北 高等学校

1 実施期間

令和2年4月1日～令和7年3月31日

2 研究開発計画（令和元年度策定）の概要

(1) 構想名
「SDGsを基に新たな社会や地域の創造につながる、先進的・先端的な連携先との連携による卓越した探究的な学びの創出」
(2) 研究開発の実施対象
普通科・理数科、全学年
(3) 研究開発の目的と目標
【目的】 知識や技能を身につけ、探究の見方・考え方を学ぶことを通じてSDGsを基に課題を解決する力を培うだけでなく、これからの社会で必要とされる「課題を発見し解決する」ための資質・能力を育成するとともに、具体的には「広い知識と教養及び未来を担う自覚」「論理的思考力と主体的課題解決能力」「情報を正しく理解し、伝えたり発表したりする力」を軸として、地域・世界とつながり、自由な発想と旺盛な行動力で、新しい社会の創造を担う知性を育成することを目的とする。 【目標】 ア 「広い知識と教養及び未来を担う自覚」を身につける ・文系、理系の枠にとらわれず、人類が長い歴史の中で培ってきた幅広い知識と教養を身につけようという意欲を育む。例えば、情報の収集のため、積極的に取材・フィールドワークに出ていく意欲を育む。 ・将来、現代社会の一員としてさまざまな場面で中心的な役割を果たしていく自覚を持つとともに、未来の世代に対する責任感を育む。例えば、研究発表会やフォーラム等で自分たちの考えを、自信を持って発表できる調査・検討を行う態度・姿勢を育む。 イ 「論理的思考力と主体的課題解決能力」を身につける ・あらゆる可能性・方策を論理的に探り、判断する力を身につける。情報を収集し分析する力を育む。 ・先入観や常識にとらわれず、本質に目を向け、自ら考え行動する力を身につける。 ・収集した多くの情報を踏まえ、課題を発見する力を育む。 ウ 「情報を正しく理解し、伝えたり発表したりする力」を身につける ・情報の分析と評価を的確に行い、効果的に相手に伝える方策を身につける。 ・人の意見や立場を知り、その気持ちを想像する中から、他者に共感し他者と協働する姿勢・態度を身につける。
(4) 研究開発概要（目標を達成するための具体的取組や方策）
ア 普通科「探究」自主編集テキスト改訂と指導マニュアルの作成 イ 理数科「課題研究」における基礎的スキルを身につけるための基礎実験の選定と、それを利用した、指導マニュアル・テキストの作成 ウ 「卓越した探究的な学び」につながる普通科「探究」、理数科「課題研究」の指導計画と指導方法の構築と国連「持続可能な開発目標（SDGs）」との関連づけ エ 「卓越した探究的な学び」に活きる教育課程の研究

- オ 大学、自治体、企業、病院等の外部機関との連携の具体化
- カ 専門性の高い外部指導者を招いての生徒実習及び教員研修の実施
- キ 図書館の機能を拡充した「コラーニングスペース『学習創造ラボ』」の設置
- ク 「課題研究」における追実験、検証が行える環境と実験機器等の充実及び整備
- ケ 情報機器・情報環境の整備と利用及び職員対象の研修会の実施
- コ 外部コンテストへの参加と校内コンテスト実施の検討
- サ 3年次における「総合的な探究の時間」の創設

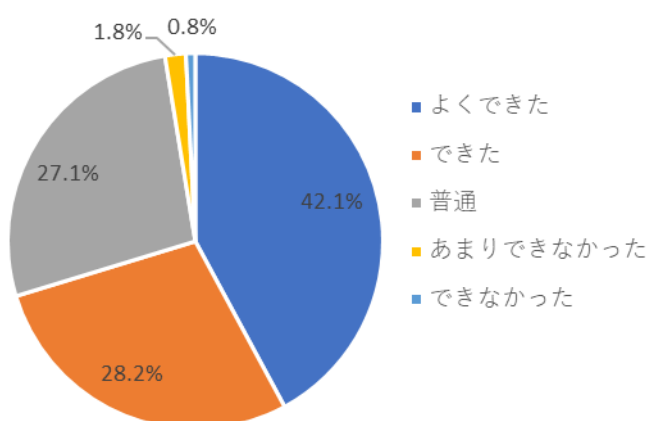
3 最終年度の研究開発計画（令和元年度策定）における目標や目的の達成状況について

(1) 目標の達成状況について

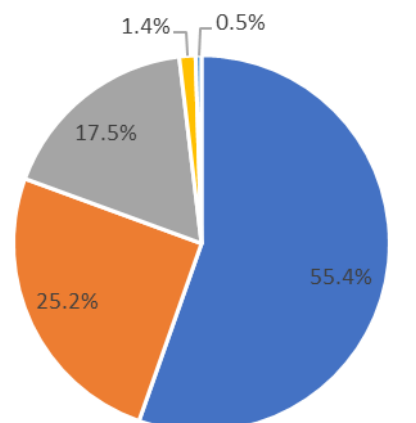
最終年度の研究開発の目標（2 研究開発計画（令和元年度策定）の概要(3)）の概要に対する生徒のアンケート結果は以下のア～ウのとおりである。それぞれの目標に対して、5段階でのアンケートを行った。以下、円グラフは令和6年度のアンケート結果である。

ア 「広い知識と教養及び未来を担う自覚」を身に付けることができたと思うか

1 学年



2 学年



令和4年度1学年60.7%、2学年72.5%、令和5年度1学年70.9%、2学年81.6%、今年度は1学年70.3%、2学年80.6%の生徒が「よくできた・できた」と回答している。1学年から2学年にかけての探究活動で、着実に自覚の向上が見受けられる。昨年度との数字の上での大きな違いはないが、安定的に自覚の養成に学習プログラムが役立っていると考えている。昨年同様のワークショップを行い、国内外の課題について考える機会や、その中で自分たちができることは何かを考える活動を取り入れたことがこの結果に繋がったと考える。

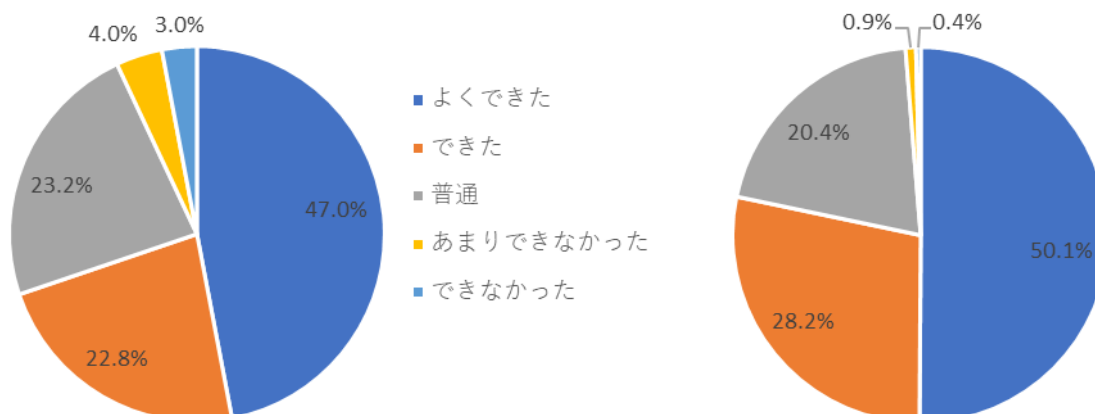
1学年の探究基礎プログラムでは、ワークショップを通して、生徒の視点だけでなく探究サポーターの視点からも考える事で、様々な角度から物事を捉える経験ができたと思える。また、「PBL (Problem Based Learning)」で、社会問題に文献を通してアプローチし、一歩進んで社会問題のことを学んだことも有益であったと思われる。

2学年の探究プログラムでは、実際に自分たちで設定した探究テーマを深めていく中で、学校外のサポーターや企業等と連携することを通して、普段の授業だけでは触れることのできない知識・教養を得ることができたと思われる。

イ 「論理的な思考力と主体的課題解決能力」を身に付けることができたと思うか

1 学年

2 学年



令和4年度1学年63.3%、2学年76.7%、令和5年度1学年68.6%、2学年77.2%、今年度は1学年69.8%、2学年78.2%の生徒が「よくできた・できた」と回答している。2年間取り組んだ生徒たちは、3年間全てにおいて1学年の時に60%代であったものが2学年では70%後半に伸びている。プログラムのまとめとして、発表スライドの順番を工夫したり、論文にまとめたりすることが有効に働いている結果と考えている。

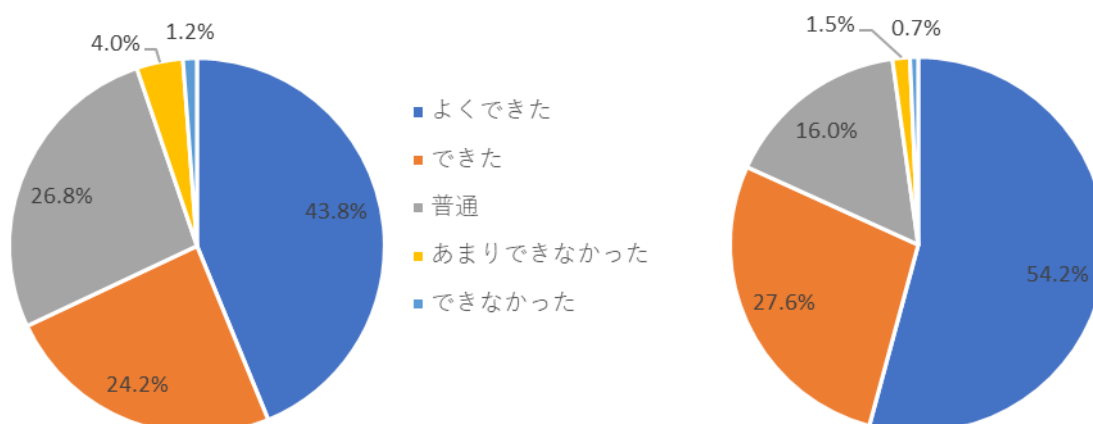
1学年の探究基礎プログラムの「ミニ探究デイ」では、「佐久地域の空き家問題の解決」もしくは、「エコスクールを作る」という問題のどちらかを選択し、その解決を1日かけて調査して、発表する活動を行った。その過程で、うまくいかなかったことを振り返ることを通して、自らの足りないところを強めようという主体性を持った活動につながったと思われる。

2学年の探究プログラムでは、教員とのセッションを通して自分たちの探究活動につっこみを入れられる場面を多く取り入れた。生徒たちは、その解決のために必要なことや論拠を組み立てる経験を積んだことが結果につながったと考える。

ウ 「情報を正しく理解し、伝えたり発表したりする力」を身に付けることができたと思うか

1 学年

2 学年



令和4年度1学年65%、2学年80.7%、令和5年度1学年67.7%、2学年80.9%、今年度は1学年68%、2学年81.8%の生徒が「よくできた・できた」と回答している。2年間のプログ

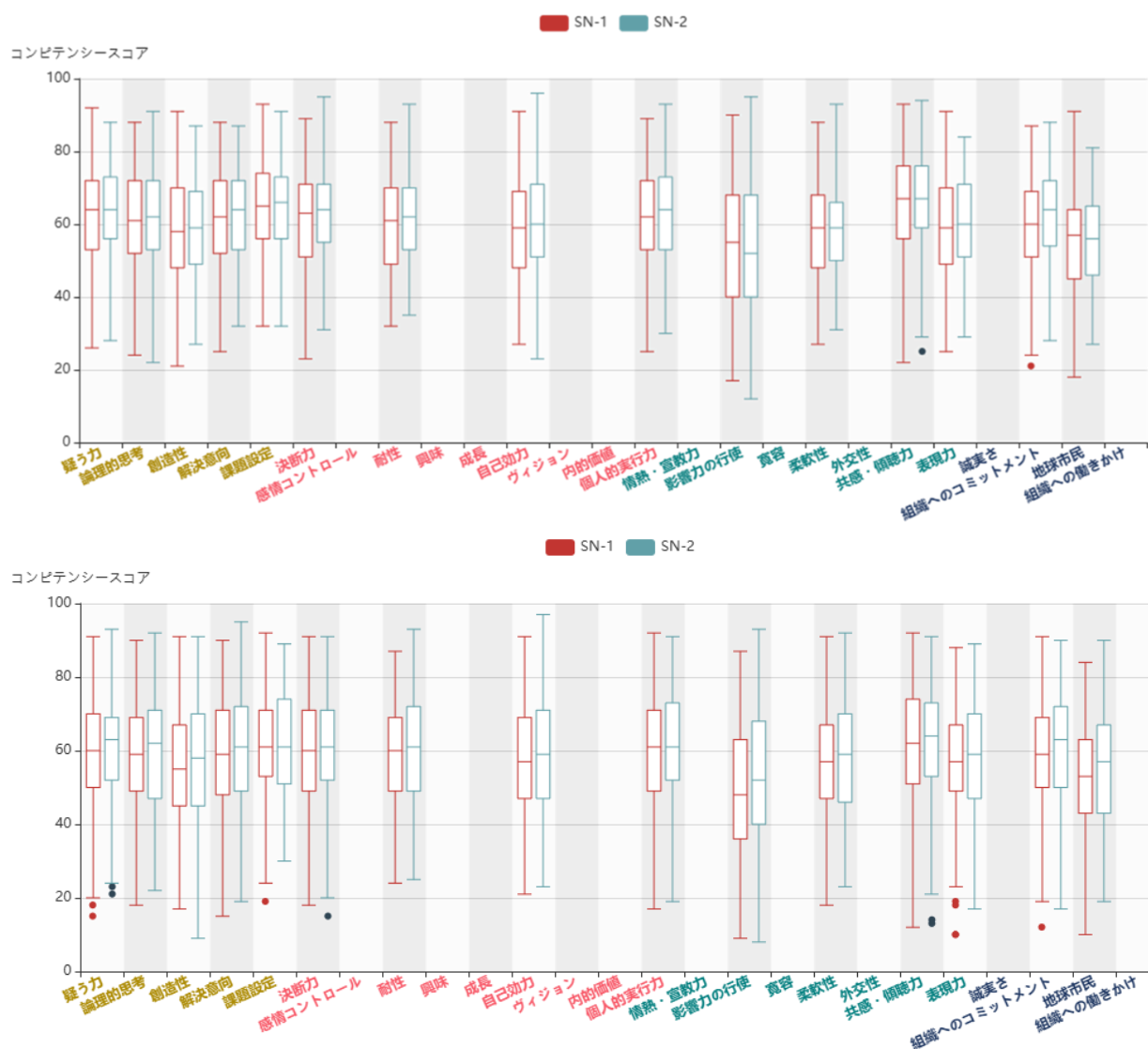
ラムを通して、アウトプットの間を多く設定した点がこの結果につながったと考える。発表会や、プレゼンテーションコンテストといった全体、多人数の前での発表はもちろん、日常的な探究の授業でもアウトプットを多く取り入れた。

具体的には、1学年の探究基礎プログラムでは、すべてのプログラムに他者との交流や、授業のまとめについての発表を取り入れた。2学年の探究プログラムでは、サポーターであるユーザーによるプレゼン講座を行い、発表についての心構えを学んだ。

エ 「A i G R O W」の分析結果

令和6年度からの導入のため、データの蓄積はないが、「A i G R O W」という自己評価、他者評価を通した資質・能力の数値化についても導入し、プログラムの改訂、生徒へのフィードバックに利用している。以下が1学年、2学年の結果である。「SN-1」は4月（1回目）、「SN-2」は1月（2回目）に行った結果である。もちろん、直接的に探究活動だけが関連するわけではなく、生徒の日々の成長、普段の生活における経験等、様々な要因による変動はあるが、自分の資質・能力を数値化、見える化して、「探究」「探究基礎」で、フィードバックする中で、生徒の資質・能力の向上をバックアップしたいと考えている。

1 学年（上） 2 学年（下）



(7) プログラム改訂への利用

計測結果全体として、効果量がマイナスのものはなく、全ての資質・能力が微増した。特に「組織へのコミットメント」は、両学年で効果量が高く、全プログラムでグループ活動を取り入れている成果が出た結果となった。逆に、「課題設定」については、効果量が最も少なくなった。これらの結果を踏まえて、次年度のプログラム改訂では、「課題設定」について学ぶ部分を取り入れていきたい。このように、本校で向上させたい資質・能力を数値化して、見えるようにすることでプログラム改訂の参考にしてきたいと考えている。

(イ) 生徒へのフィードバック

生徒へのフィードバックは、大きく全体へのフィードバックと、個人へのフィードバックに利用している。

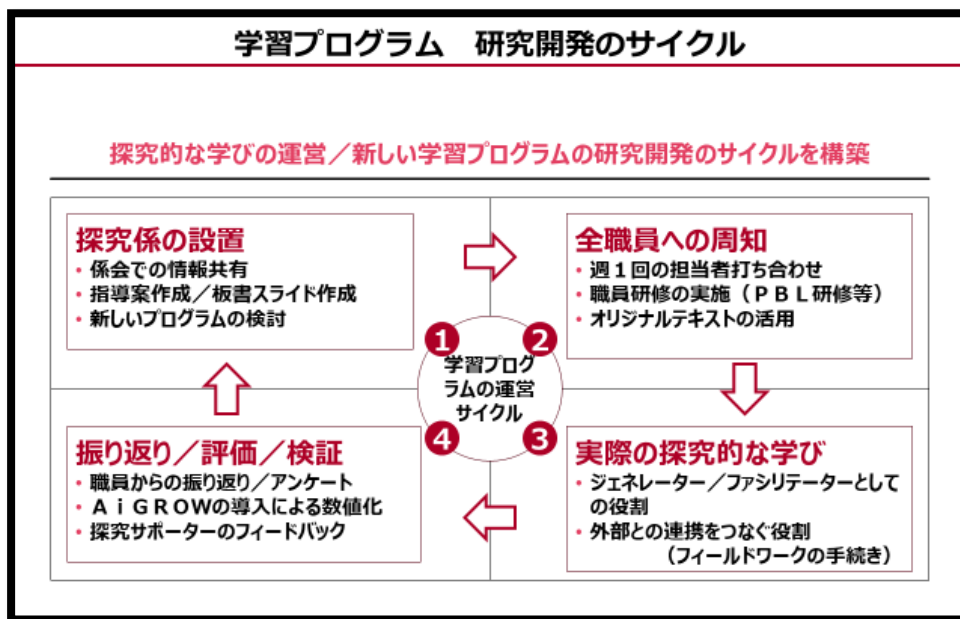
全体へのフィードバックとしては、全体でのスコアを確認した後に、その資質・能力を伸ばすためにどのような行動がとれるかを考える等の活動を取り入れ、自分の行動、他者の行動について考える機会としたいと考えている。

個人のフィードバックでは、個人票を生徒に返し、自己の振り返りと、実際の数値を照らし合わせる中で、自分に身についたと考える資質・能力の自覚と数値の合致を知り（また、不合致を知り）、自信を持ったり、再度自己分析をしたりすることを企図している。具体例として、生徒Aを挙げる。令和6年度の生徒Aは振り返りの感想で、「まだまだ考えが浅く、力が足りないんだと実感した一方で創造性や視点を変えてみることは得意という新たな発展も見つかった。2年間探究してみて、ただただその探究テーマについて考えた事もそうだけど、それ以上に仲間とのワークや実際にプレゼンする経験、本物に触れたり、職人や地域の人と交流できたという経験がとても貴重で力になりました。」とまとめた。下線を引いた部分の自覚と、生徒Aの数値の変化（「創造性」4月：57⇒1月：76、「疑う力」4月44⇒1月73、「組織へのコミットメント」4月61⇒1月：81、「表現力」4月36⇒1月77）が合致している。これらを生徒Aに伝えることを通して、生徒Aの資質・能力の向上の自覚が確信になると考える。そして、それがモチベーションになり、さらなる行動・探究的な学習につながると思われる。このように、全体、個人へのフィードバックを通して、生徒の探究的な学びの意欲向上につなげたい。

(2) 具体的取組：新しい学習プログラムについて（ア・イ・ウ・エ・ケ・コ・サ）

ア 学習プログラム 研究開発サイクル

探究係での意見交換を経て、学習プログラムの研究開発サイクル（下の図）を作り、誰が担当者になっても運営が可能という継続的なシステム、振り返りを経て修正が可能なシステムを作成、運営できたことは、大きな成果である。



(ア) 指導案作成と、担当の打ち合わせ（図の①・②）

授業担当者が誰になっても対応が可能になるように、係でそれぞれのプログラムの指導案を作成して授業に臨んでいる。それによって、それぞれの学年に任せきりで年度ごとに学ぶことが変わるということを防ぎ、学校全体での取組として、機能するようにしている。

また、週に1度担任を除く担当者で集まって、授業の打ち合わせを行っている。ここで、探究的な授業のやり方に不安を持っている教員のサポートをしたり、前回の授業でやりにくかった部分を話し合ったり、授業に向けての修正点を協議したりしている。これらの出てきたことを指導案に活かしたり、次年度のプログラムの改訂に活かしたりしている。

(イ) 振り返りと次年度に向けての動き（図の③・④・①）

実際に授業をしてもらった後に、振り返りやアンケートを担当職員から提出をもらい、次年度のプログラム改訂に活かしている。出てきた意見を係会で共有し、次年度のテキスト、プログラム導入、授業の指導案に活かしている。以下では、具体的なプログラムのサイクルを報告する。

Ⅱ 学習プログラムサイクルと具体的学習プログラム（「ミニ探究デイ」）

(ア) 学習プログラムサイクル①

「ミニ探究デイ」というプログラムが前年度の振り返りで出てきた、「1学年の『探究基礎』と、2学年の『探究』のつながりがわかりにくい」という意見を受けて導入したプログラムである。入学後の最初の探究授業で、1日まるごとを使って、「調査」「分析」「提案」「発表」の探究サイクルを経験し、うまくいかなかったことを考える中で、そのうまくいかなかったことを補う形で、1学年の「探究基礎」の学びにつなげようと考えた。その中で、係会でのプログラム検討、指導案作成を通して導入した。

(イ) 学習プログラムサイクル②

授業前に担当者に集ってもらい、打ち合わせを行った。担当者からは、「授業の流れを示す

スライドがほしい」等の意見をもらったので、作成し授業に臨んでもらった。

(ウ) 学習プログラムサイクル③

実際に、授業を担当してもらった。授業では全グループが発表し、こちらが意図していた、うまくいかなかったことについても考えられている感想が多く見受けられた。具体的には、「スライドの作り方」「定義の仕方」「調査対象の正確性」等の感想が多かった。

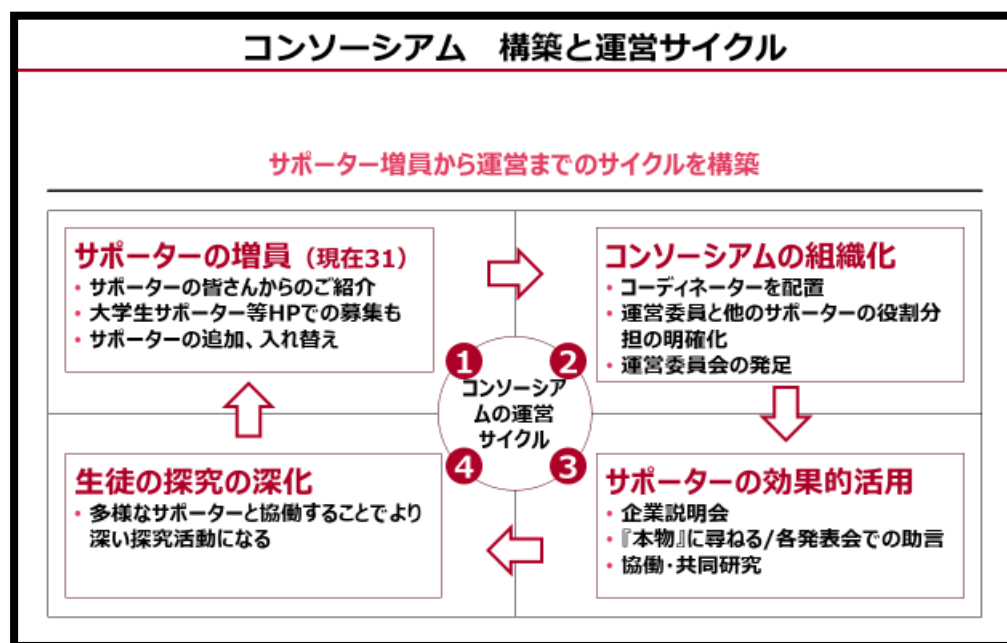
(エ) 学習プログラムサイクル④

授業後にアンケートをとり、授業を振り返った。職員からは、「教員研修の必要性」、「専門家からの話の必要性」が挙げられた。これらの意見を参考にしながら、係会で情報を共有し、次年度のプログラム改訂を行っている。現在、決まっているのは専門的な探究サポーターを招き、アドバイスをいただくことの導入である。

このように、自己修正的なサイクルになっており、アップデートしながら継続性があるものになっている。

(3) 具体的取組：コンソーシアムについて（オ・カ・コ）

ア コンソーシアム運営のサイクル



コンソーシアム運営についてもサイクル（上の図）を構築し、学校全体として継続的な運営ができるようになっている。

サポーターの増員については、教職員だけでなく、地域連携コーディネーター、探究サポーターの方々からも紹介いただき、研究指定1年目の10名から31名にまで増員した。教職員だけがサポーターに声をかけをするという負担の偏り、負担の増加を解消したことは大きな成果であった。また、令和5年度には、探究サポーターの代表3名、地域連携コーディネーター、学校側から成る運営委員会を発足し、コンソーシアムの規約（別紙）を作成できた。これにより、共通認

識を持って本校の探究的な学びにご協力をいただいて、運営が可能となっている。

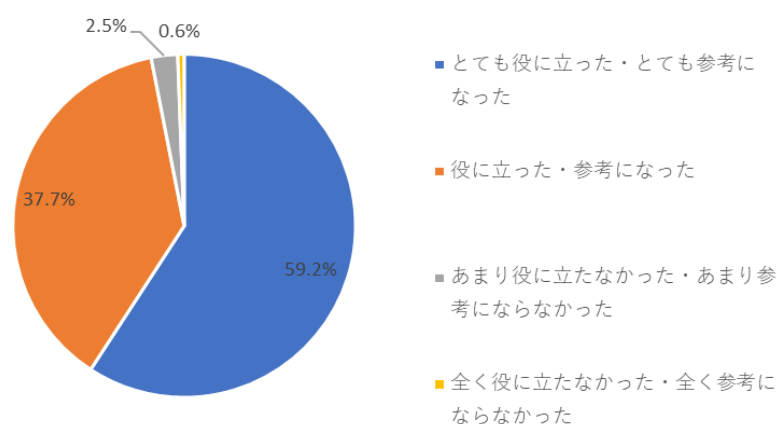
以下では、サイクルの③「サポーターの効果的活用」と、サイクルの④「生徒の探究の深化」を報告する。

イ 探究サポーターの活用

(ア) 2 学年「本物に尋ねる」(サイクルの③「サポーターの効果的活用」)

令和 6 年度 2 学年 7 月に行ったワークショップである。探究サポーター 10 名に参加してもらい、ここまでの探究活動の進捗状況をグループごとに報告し、アドバイスをもらった。自分たちと違う見方や考え方を持つ専門家または大人の視点からの指摘をもらい、夏休みにやらなければならないことを確認した。

以下は、令和 6 年度のワークショップを経た生徒アンケートの結果である。



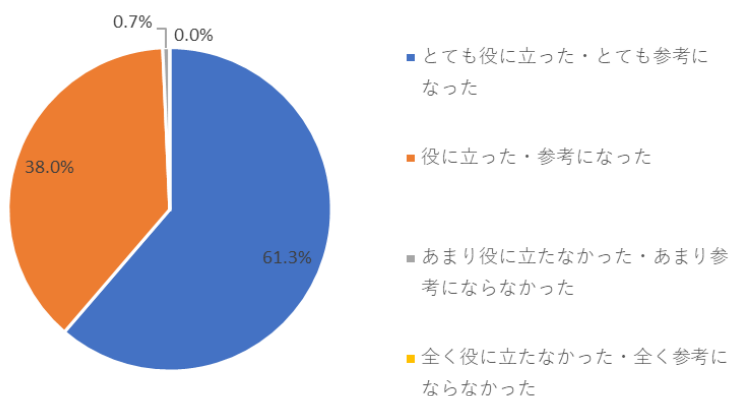
令和 5 年度同様、「とても役に立った・役に立った」という回答が 95%を超えた。生徒の感想にも「これからの探究、人生にとってとても大きな機会になったと思いました。もっと自分の学びを高めて、色々な方のお話を聞いたり、インターネットだけでなく文献や他の情報コンテンツからも有用なものを得られるようにしていきたいと思いました」や、「サイトだけでは知り得ない情報や今現在の課題をより深く知れるいい機会になったと思います。この講義を生かして今後の探究活動を進めていけたらなと思いました」とあるように、その後の探究活動に向けての方向付けとして認識したグループが多くあり、サポーター活用として有効であった。

(イ) 1 学年「地域課題ワークショップ」(サイクルの③「サポーターの効果的活用」)

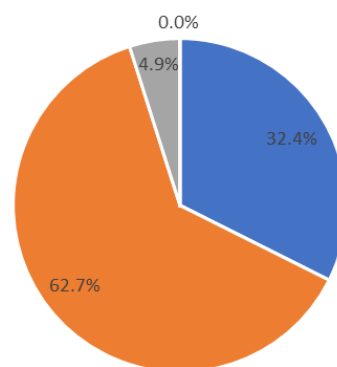
令和 6 年度 1 学年 11 月に行ったワークショップである。探究サポーター 13 名に参加してもらい、現在の自分のお仕事での課題や地域の課題を、生徒といっしょに考えるワークショップを行った。サポーターからお話をいただき、大人自身が課題に挑戦したり、それを解決したりする姿を見せる中で、生徒たちにも自ら課題を設定し、楽しみながら解決してもらいたいという思いを込めて、企画した。

以下は、令和 6 年度のワークショップを経た生徒アンケートの結果である。11 月 11 日（月）に行ったものと、11 月 18 日（月）に行ったものである。

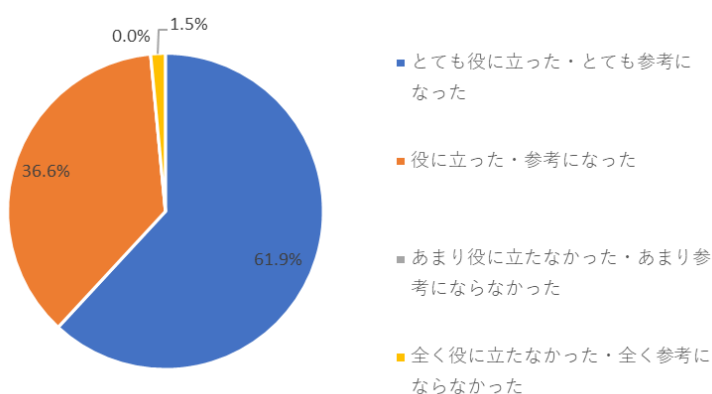
・ 11 日「ワークショップ内容」について



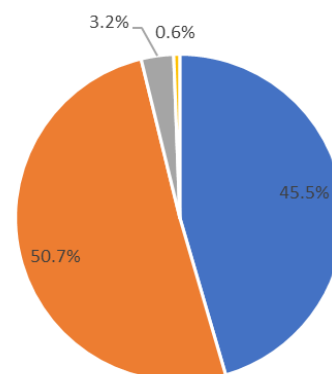
・ 11 日「テーマ決め」に向けて



・ 18 日「ワークショップ内容」について



・ 18 日「テーマ決め」に向けて



ワークショップの内容、自分たちのテーマ決めに向けて、どちらも 95%を超える生徒が「とても役に立った・役に立った」と回答した。生徒の感想にも「普段の生活の中であまり目立たないところにも地域を活性化させるものがあるということを知った。自分も周りの環境に少し目を向けてみたいと思った」や、「今回、建築について新しいものを作るだけではなく、現在ではその建物を変えて利用していくことがあることを今回学ぶことができたのでよかったし、新しい視線に気づくことができたのでとてもためになったのでよかった。今後地域との関わりをどう使っていくのか考えていき、地域をどのように活性化できるのか考えていきたい」というものがあり、新たな視点を得たり、地域に関心が向いたりする姿が見られた。実際に 1 学年でテーマ決めをしている中でも、地域課題や社会問題に関心を持って、テーマを考えているグループが増加している。

(ウ) 生徒の探究活動と探究サポーターのつながり（サイクルの④「生徒の探究の深化」）

生徒の探究活動と探究サポーターのつながり方には、大きく 2 つの傾向があった。1 つ目の傾向は、探究サポーター自身が生徒の探究活動のアドバイザーとして、直接アドバイスをし、関わってもらったというものである。生徒は、専門家からの意見を聞き、自分たちと違う見方や考え方を学んだ。それを通して、生徒の感想に「ただただその探究テーマについて考えた事もそうだ

けど、それ以上に仲間とのワークや実際にプレゼンする経験、本物に触れたり、職人や地域の人と交流できたという経験がとても貴重で力になりました」とあるように、自分たちの探究を深めていくことができた。

もう1つの傾向は、探究サポーターがつなぎ役となって、専門家と生徒の探究をつないでくれたというものである。他者との交流による生徒の探究活動の深まりは1つ目の傾向と同様である。ただ、生徒の興味関心が多岐にわたり、様々なテーマが出てくる中で、探究サポーターだけで全てをカバーすることは難しい。そこで、多様な視点から生徒の探究活動と外部をつないでもらったことは、生徒にとってありがたい経験となった。また、教職員の負担軽減にもつながったため、次年度以降も継続して行えるように、生徒の探究テーマを、探究サポーターに周知し、情報を共有していく中で、コミュニケーションを深めたい。

(4) 施設・設備について (キ・ク・ケ)

ア 探究ステーション

施設として探究活動専用の教室を設置し、利用している。具体的にはグループワークや、活動の配信、探究関連の書籍を置いて、学びを深める等の活動を行っている。また、卒業生の論文集やポスターを設置している。参考に見に来る生徒もあり、探究活動の拠点となっている。

次年度からは、図書館係との連携を強めて、探究テーマごとの関連書籍設置も検討したい。

イ 探究的な学びを深める設備

D Xハイスクール採択校ともなり、探究的な学びをデータ面で深める設備を設置した。具体的には、3Dプリンター・動作解析ソフトである。3Dプリンターは、理数科の探究的な学びにおいて「扇風機の風の強さを強くするには」というテーマでの探究活動で利用した。プロペラの角度を変えて3Dプリンターで作成し、そのデータを蓄積する中で、探究を深めていた。また、「動作解析ソフト」では、自分たちのフォームの速度、角度、位置などをデータ化し、動きの改善を追求した。この設置により、スポーツ探究の可能性を広げている。また現在、弓道班、テニス班、陸上班、バレー班が班活動の時間においても使用しており、探究的な学びの授業時間だけでなくとどまらない広がりを見せている。

4 研究開発と学校全体の教育活動の改善・改革との関連づけ

(1) 探究的な学びの広がり

本研究を通して、探究的な学びが以下の3点の広がりを見せたことが、本校にとって大きな改革となった。

1点目は、「生徒の知の広がり」である。現代社会や地域社会の課題を考える際には、偏った知識ではなく様々な知識や視点を組み合わせる必要がある。「プロジェクト学習」や「PBL (Project Based Learning)」のプログラムを通して実践的にそれらに触れることはもちろん、ワークショップやフィールドワーク、発表等から自分とは異なる他者の視点に触れたことも「知の広がり」に資するものであった。また、「A i G R O W」のフィードバックを通して自分の資質・能力が数値で向上したことを実感することができるようになり、自己肯定感を高め、さらなる一步を踏み出す起点にもなった。

2点目は、「探究活動の進路活動への広がり」である。探究活動で学んだプレゼンテーション力や探究内容を総合型選抜へ利用することはもちろん、その他にも探究活動が進路活動への広がりを見せた。探究サポーターを進路講話に呼んだり、探究係と進路係の協働によって探究を用いた進路先についての説明資料を作成したりした。進路活動への広がり、生徒だけでなく職員も探究活動への取組の動機づけにもなった。

3点目は、「探究活動の課外活動への広がり」である。探究的な学びを経る中で、授業だけに留まらない探究的な姿勢が身についてきている。「動作解析ソフト」の導入により、それが強化され、運動部を中心に「部活動でも探究を」という雰囲気が出てきており、探究活動が課外活動にも広がっている。また、今年度より本校独自の海外研修プログラム「Change Our Mindset」も実施され、21名の生徒が参加する予定である。これも、自分の探究したいテーマを持って参加することになっており、探究活動の広がりにとらえることができる。

以上のように、学校全体の教育活動で探究活動を色々な場面に関連させて取り入れていこうとする姿勢が醸成された5年間であった。

(2) 教員同士の学び合い／自分事化の探究活動

探究活動が教員の意識改革にもつながり、教員同士の学び合いの意識を強めている。探究活動を通して、生徒に対して「教える」一辺倒ではうまくいかないことを、教員自身が学び、ファシリテーター、ジェネレーターとしての役割の重要性を知り、スキル向上に取り組み始めている。数学と理科では教科横断的な学びにも挑戦している。学習プログラムの研究開発サイクルにおいて、毎週の打ち合わせや、振り返りアンケートを取り入れていることによって、人まかせや学年まかせでなく、教員自身が自分事化した探究活動に取り組んでいる。このようなシステムによる自分事化を進められた点も大きな改革となった。

また、教科学習への探究活動の導入も徐々にではあるが、進んできている。例えば、国語科における探究学習導入の成果が、藤森裕治(2024)『これからの国語科教育はどうあるべきか』(東洋館出版社)に掲載されるなど、探究活動の手法を用いた授業の導入が見られる。

(3) 地域との連携

コンソーシアムの活用が、本校の教育活動を学校内だけに留まらない開かれたものになっている。生徒の探究活動へのアドバイス、本校の探究活動プログラムへのアドバイスをいただくことで、外部の知見を取り入れることにつながっている。さらに、探究活動に留まらず、進路活動や部活動へも探究サポーターとしてつながってもらい、活動がどんどん広がっている。また、現在進行中ではあるが、本校の海外研修プログラムについても探究サポーターの協力を仰ぎ、協力体制を構築することを考えている。地域のイベントにおいても、生徒の発表の場を設けてもらい、生徒のプレゼンテーション力等の資質・能力の向上につながっている。

(4) 学校設定科目の新設の検討

上記(1)～(3)の改革が進んできている点からも、教科横断・探究的な学びを核とした学校設定科目の新設を検討している。この5年間で得た知見をもとに、形式的でない教科横断のカリキュラムを作成し、新校の核となる科目にしたい。

5 研究開発で明らかになった課題及び改善方策

研究開発を5年間行ってきた中で、大きく以下の5点について課題があると感じた。

(1) 探究サポーターと生徒の探究活動をつなげるシステムの改良

5年間の研究開発を経て、生徒の探究活動と外部機関の連携が増えてきたことは大きな成果である。しかし、外部との連携を求めているながら、うまく連携できないグループも見られた。生徒の活動のまとめの中にも、「自分たちの視点だけでやってしまったので、外部の協力を得ればよかった」や、「どんな協力を得れば良いか、よくわからなかった」という感想が見られ、生徒の探究活動と探究サポーターをつなげるシステムを改良する必要性を感じた。

係において生徒の探究活動のテーマ集約とサポーターへの周知、外部連携の追跡調査とそれのサポーターへの周知を行うことで、よりつながりやすいシステム、運営の構築を模索したい。

(2) 継続的・持続的な運営費用の捻出の必要性

5年間の指定校での予算がついていたことによって、コンソーシアムに関する必要経費を知ることができた点は、大きな成果である。しかし、コンソーシアムを継続して運営していくためには、サポーターの旅費や謝礼等の、継続的・持続的な運用費用が必要となる。その獲得・捻出が課題である。次年度以降は、継続的・持続的な運用費用の捻出のために、同窓会への援助依頼や外部支援資金等の申請を検討して、コンソーシアムの継続的な運営を考えたい。

(3) 地域コンソーシアムの佐久地域への広がり

5年間の研究開発の中で、規約の制定、運営サイクルの構築を行い、佐久エリアコンソーシアムを形にしたこと、コンソーシアムを本校の探究活動に活用できるようにしたことは、大きな成果である。今後は、本校の探究活動だけにとどまらず、コンソーシアムを地域へ広げていくことが次の課題である。そのために、運営委員会・サポーター会議で意見交換をすることで、生徒の探究的な学びとサポーターの連携をしやすいシステムを開発する必要がある。本校での開発を他校に広げる汎用的なシステム構築を目指して、次年度以降も研究を重ねたい。

(4) 先行研究へのアプローチの強化の必要性

探究発表会を経て、外部との連携が増えてきたことについては高い評価を得たが、探究サポーター・アドバイザーから「先行研究・先行実践」へのアプローチの弱さを指摘された。生徒の探究活動を深めるためにも、先行研究・先行実践をしっかりとおさえることは重要である。そのために、生徒の意識づけももちろんであるが、現在のプログラムにある「PBL (Problem Based Learning)」を何周も生徒自身が回せるような時間的余裕と、指導体制を構築したい。

(5) グループ探究から個人探究（ゆるいグループ探究）へ

グループ探究を行う中で、「自分の興味関心でやりたかった」という感想が多く見受けられた。テーマを決めるプログラムにおいても、グループでテーマを集約する中で、興味関心とは違うテーマに変更する生徒が見られた。個人探究（ゆるいグループ探究）にすることで、より生徒の興味関心からテーマを設定することが可能になると考える。また、外部コンテストへの参加も促しやすくなることから、積極的に外部のコンテストを活用して、生徒の発信力の育成につなげたい。

そのために、現在の教職員の探究グループへの関わり方のシステムを維持しつつ、個人探究、ゆるいグループ探究に対応した形にしていくことが次の課題である。係会での検討を経て、次年度にメリット・デメリットを挙げることを通して、システムの構築を目指したい。

6 次年度以降の成果普及の取組と自走計画

(1) 学習プログラムの発信

以下のものについては、各校へ通知して、取組を発信したいと考えている。

- ・ミニ探究デイ（4月）
- ・プレゼンテーションコンテスト（5月）
- ・普通科探究発表会（12月）
- ・理数科課題研究発表会（1月）

オンラインでの発信はもちろん、対面でも学習の様子、発表の様子を発信したいと考えている。対面で公開し、広く成果を発信し、それに対するご意見をもらう中で、次年度のプログラム改訂につなげたい。

(2) 本校の探究活動についての説明・発信

生徒の実際の活動の発信だけでなく、本校の探究的な学びの取組、特に運営システムについても説明、発信をしていきたい。現在、以下の場面での発信を考えている。

ア 探究発表会での説明会

令和6年度も行ったが、公開している探究発表会で、来場いただいた方に本校の探究活動やプログラムについて説明するブースを設置し、説明をする機会を設ける。

イ 公開授業での学校説明会

土曜公開授業時の学校説明会で「探究・課題研究」について、中学生、中学生保護者に高校生の学びの様子を伝え、本校の探究について知ってもらう機会を設ける。

ウ 探究・課題研究専用ホームページ

令和6年度に開設した探究・課題研究専用ホームページを随時更新し、生徒の探究活動や探究サポーターについて周知する。

(3) その他の成果普及

以下の点についても積極的に努めたい。

- ・地域で行われるイベントなどに参加し、探究した成果を発表する。
- ・日輪祭（文化祭）で発表ポスターの展示及び個人探究の発表の場を設ける。
- ・マスコミへの取材を要請し、効果的な情報発信を行う。
- ・探究の成果をサポートする関係団体に送付し評価を依頼する。

(4) 自走計画について

来年度以降の自走について、以下の2点を考えている。

ア サイクルの活用

「学習プログラムの研究開発サイクル」、「コンソーシアム運営サイクル」を用いれば、授業についてはアップデートしながら、自走することが可能であると考えている。

サイクルにのっとり、指導案等を用いて職員への説明を丁寧に行ったり、意見をもらったりしながらアップデートすることで、全職員が共通認識をもった上で、職員の自分事化した探究的な学びを継続していきたい。

イ コンソーシアム運営について

コンソーシアム運営については、規約ができているため、基本的にはそれに沿って運営していくことで、自走が可能であると考えている。探究サポーターとの共通認識を持つために、運営委員会やサポーター会議を利用しながら、丁寧な説明を心がけたい。その中で、「ゆるいつながり」を意識してもらい、サポーター側、学校側のどちらも無理をしない形を模索したい。

しかし、持続可能な経済的支援体制には課題が残っている。5(2)で記述したとおり、同窓会からの支援も含め、外部支援資金等の活用が持続可能となるよう、研究をしていきたい。

7 令和6年度（最終年度）の事業実施体制

(1) 令和6年度の研究開発の実績

① 取組の到達目標(又は仮説)、実施(活動)日程及び内容	
【目標】	
ア コンソーシアム運営と規約検討	- 幅広く自治体や企業のサポートを得られる体制が構築できたので、今年度はコンソーシアム組織を公にPRし、本校の活動を周知していく。 - 運営委員会、サポーターの規約検討・改正を行い、共有する。 - 探究学習と企業をつなぐシステムの改良を行い、さらなる探究学習の深化を進めていく。
イ 自走可能なシステム構築	今年度の事業が終了したのちの金銭面を含め、新校開校までを視野にコンソーシアムを維持しながら生徒たちの探究的な学びを支援する体制を整える。
ウ 評価システム構築	- 評価方法と評価基準の見直しと検討を行う。 - 生徒の振り返りの他に、コンソーシアムやプログラムの評価を教員、サポーター等に依頼し、実施する。 - 生徒たちの非認知能力の成長や主体性等の資質・能力の成長を図るため、IGS株式会社AiGROWを導入し、客観的な評価として数字を出し、学校独自の目指す力と客観的データの整合性を検証する。
エ 進路×探究サポートシステムの構築	- 生徒の動機付けの研究を実施する。 - 探究活動と進路がつながりそうな生徒は、進路と連携し、進路実現のサポートを行う。 - 係としても総合型選抜等の多様な入試形態を調べ、共有・周知する。
【実施(活動)日程及び内容】	
ア コンソーシアム運営と規約検討	
(ア) ミニ探究デイ	4月22日(月)

- ・探究サイクル（「調査」「分析」「提案」「発表」）を経験
- ・サポーターからの題材等アドバイス（「佐久地域の空き家問題」「エコスクール」）
- ・講評等

(イ) 運営委員会・サポーター会議

5月20日（月）（サポーター18名、県教育委員会、学校長、教頭、連携コーディネーター、担当職員）

- ・サポーター顔合わせ
- ・令和5年度末に作成しているコンソーシアムの規約の共有と意見交換
- ・コンソーシアムの運営方法、サポーターの任期や今後の在り方の共有
- ・コンソーシアムのPR方法の検討
- ・今年度の計画と来年度の方向性の確認

9月17日（火）（運営委員3名、学校長、教頭、連携コーディネーター、担当職員）

- ・ここまでの活動報告と意見交換
- ・探究活動の普及についての意見交換
- ・コンソーシアムの自走についての意見交換

2月4日（火）（運営委員3名、学校長、教頭、連携コーディネーター、担当職員）

- ・ここまでの活動報告と意見交換
- ・探究活動の普及についての意見交換
- ・コンソーシアムの自走についての意見交換
- ・コンソーシアム規約についての意見交換
- ・海外研修についての意見交換
- ・佐久新校（仮称）の地域連携についての意見交換

2月（サポーター全体に書面を送付し、書面会議）

- ・今年度の事業報告と意見交換
- ・運営委員会で確認されたことの確認
- ・次年度についての意見交換

(ウ) プレゼンテーションコンテスト 5月20日（月）（探究サポーター18名）

- ・代表グループの探究内容についてのプレゼンテーションコンテスト
- ・サポーターになった方に見ていただき、探究イメージを共有
- ・サポーター同士の顔合わせ
- ・サポーターによる講評

(エ) サポーターによるワークショップ

「本物に尋ねる」（2学年）7月22日（月）（探究サポーター10名参加）

- ・生徒の探究活動の中間報告
- ・ワークショップの講師
- ・生徒の探究へのアドバイス

「進路」×「探究」（1学年）7月24日（水）（探究サポーター8名参加）

- ・サポーターによる業種別に業務内容についての講演、文理選択のアドバイス
- ・ワークショップの講師

「地域課題」ワークショップ（1学年）11月11日（月）・11月18日（月）

（探究サポーター13名参加）

- ・サポーターによる地域課題ワークショップ

- ・ワークショップ各種講座の講師

(オ) 探究発表会

普通科探究発表会 12月14日(土)(探究サポーター18名参加)

- ・2学年普通科によるポスターセッション形式の発表会
- ・生徒たちの成果を見学／アドバイス

理数科課題研究発表会 2月1日(土)

- ・2学年理数科による成果発表会
- ・生徒たちの成果を見学／アドバイス

(カ) 通年での取組

- ・コンソーシアム公表に向けての準備
- ・サポーターと探究を結ぶシステム運営(改良)

イ 自走可能なシステム構築

(ア) 通年での取組

継続的な運営資金の調達

- ・同窓会に生徒の成果や学習の効果を見てもらいながら、資金援助の折衝・意見交換
- ・外部団体補助金申請の検討

(イ) 様々なコンテスト挑戦・大学生サポーターの活用

- ・係によるコンテスト申込みの集約・生徒への周知
- ・生徒の発表の場を得ると同時に生徒のモチベーションアップ効果
- ・大学生サポーターによる伴走
- ・大学生サポーターと生徒の探究活動をつなげるシステム構築

(ウ) 地域協力(互恵関係の模索)

- ・運営委員会／サポーター会議による意見交換
- ・地域イベント等への協力

ウ 評価システム構築

(ア) A i G R O Wによる非認知能力の数値化

- ・外部評価による認知能力の成長や主体性等の資質・能力の客観的評価実施
- ・カスタムされた評価基準の検討

(イ) 通年での取組

- ・各ワークショップや活動後ルーブリック評価、フォームアンケート
- ・サポーター、教員によるプログラムや年間の活動の評価
- ・学校の目標、目的に合致しているか検討・研究

エ 進路×探究サポートシステムの構築

(ア) キャリア講演会と探究ワークショップ共同実施 「進路」×「探究」7月24日(水)

- ・1年生のキャリア講演会をサポーターで実施
- ・進路と探究が結びつくように課題の共有も依頼

(イ) 地域課題ワークショップ 11月11日(月)・11月18日(月)

- ・1年生のテーマ設定をワークショップで考察
- ・サポーターによる進路相談

(ウ) 通年での取組

- ・進路、学年との連携システムの構築
- ・探究活動と進路サポート（１年生、２年生の早い時期から）
- ・総合型選抜等の多様な入試形態調査
- ・外部コンテスト等の応募

② 目標の進捗状況、成果、評価・検証

ア コンソーシアム運営と規約検討

(ア) コンソーシアム組織のPR、本校の活動の周知

【進捗状況】

以下に示す形で、本校のコンソーシアム組織のPR、本校の活動の周知を行った。

- ・探究、課題研究専用ホームページにて公表（サポーター名簿、本校の探究活動の様子）
- ・各種説明会（詳細は、③「取組や成果の情報発信、普及に向けた取組」のエ・オ・カ・キ・クを参照）
- ・生徒へのサポーター名簿を示し、サポーターを周知（探究活動とのマッチング）

【成果、評価・検証】

各種説明会を行ったことにより、佐久地区の小中高校に本校のコンソーシアムについて、周知することができた。その説明会において、佐久地区の様子や、本校のコンソーシアムについての意見交換ができた点も有意義であった。

また、探究Frontiers講習での説明や、文部科学省・三菱UFJ視察の際に、意見交換を行えたことは、他校・他県の様子を知ることができ、本校のコンソーシアムのサイクルを見直す点で役に立った。本校のコンソーシアムに関する取組が、文部科学省・三菱UFJの「高校コーディネーター研修」の成果報告冊子に掲載される予定である。

(イ) 運営委員会、サポーターの規約検討・改正、共有

【進捗状況】

以下に示す形で、コンソーシアムの規約について検討・改正、共有を行った。

- ・サポーター会議（５月２０日（月））
内容：コンソーシアム規約の共有、意見交換
- ・運営委員会（９月１７日（火）、２月４日（火））
内容：コンソーシアム規約についての意見交換

【成果、評価・検証】

今年度の早い段階でのサポーター会議において、サポーターに規約を説明し、共有できたことは、本校の探究活動へのサポートをいただくうえで、意思統一につながり、有意義であった。運営委員会で規約についての意見交換を行ったが、現在３年間の任期の内２年目のため、改正をせず、意見集約のみ行った。来年在３年間のサイクルの最終年に当たるため、次年度に改正を検討することを確認した。

(ウ) 探究学習と企業をつなぐシステム改良

【進捗状況】

生徒の探究活動と企業（外部団体）をつなぐシステム改良のために、以下のことを行った。

- ・フィールドワークに出る手続きの「見える化」
- ・生徒へのサポーター名簿提示
- ・生徒の探究活動と外部の連携の追跡調査とサポーターとの意見交換

【成果、評価・検証】

手続きを「見える化」したことにより、担当職員が手続きをしやすくなり、前年度よりも外部連携をしたグループが増加した。

また、係としても連携先の集約の整理がやりやすくなり、グループがそれぞれ連携先に連絡を取るのではなく、まとまった取材依頼やインタビュー以来が可能になった。外部から

もまとまった連絡でありがたかったという連絡をいただいた。

具体的連携先は以下の通りである。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ・佐久市役所（観光課、環境課） | ・マイクロストーン株式会社 |
| ・諏訪東京理科大学 | ・旧中込学校 |
| ・軽井沢町役場 | ・J Aファーム |
| ・ぬくもり絆プロジェクト | ・ル・ポミエ |
| ・ピータース | ・こだま食堂 |
| ・木更津市市民課 | ・道の駅ヘルシーテラス佐久南 |
| ・株式会社ビーブレックス | ・松本旧制高校記念館 |
| ・野沢南高校 | ・GMOインターネットグループ |
| ・佐久市議会 | ・ふらっと佐久 |
| ・すずらんの会 | ・佐久地域振興局 |
| ・佐久サポートセンター | ・小諸市役所 |
| ・小海町役場 | ・J R小海線 |

連携をした生徒の活動のまとめとして、「テーマの小海線の活性化と南佐久地域の振興に沿って自分たちに出来ることを考えることができた。しかし、実際には自分たちで何かできていた訳ではなくて結果的にはプラスになった面がなかった。このまま探究活動を進められるのであれば、たくさんの方々に頂いた意見などを参考にして活動をしようとおもいます。また、班員とも協力をしあって出来ていたので良かったと思います。」という感想があった。今回の探究の不十分であった点を認識し、今後さらに外部と連携して継続的に探究を続けようとする姿勢が見られる。このように探究活動の「自分事化」に外部との連携が活かされている様子がうかがえた。

外部連携をしたグループでは、探究内容の深化が一定程度見受けられるが、不十分な点も多々ある。特に以下の2点が不十分であり、課題として認識している。

- ・生徒自身が外部連携先を見つけることが難しく、教職員の負担が大きい
- ・外部連携をするまでに「先行研究」「先行実践」が十分でなく、探究が深まらない

1点目に関しては、今年度、サポーターでもある佐久地域振興局の協力を得て、外部連携先を紹介していただいた。このような形で、教職員に限らない外部連携開拓の方法を次年度は考えていきたい。また、生徒の探究テーマと外部連携先の関連のリストを作成し、次年度の探究で利用できるようにしたい。

(エ) 地域連携コーディネーターの配置

【進捗状況】

昨年度に引き続き、地域連携コーディネーターを配置し、以下の点で協働した。

- ・探究活動のサポート
- ・探究活動のプログラムやテキスト編集へのアドバイス
- ・コンソーシアムの組織作りと運営委員会の取りまとめ
- ・生徒の探究テーマに即したサポーターの紹介
- ・職員研修（「Problem Based Learning」研修）の講師

【成果、評価・検証】

本校の探究活動のことをよく理解しているコーディネーターのため、本校の実態をおさえたアドバイスをいただき、プログラムの改定に役立った。月2回程度の打ち合わせを定期的に行ったことで、細かな連携をとれたこともプログラムの見直しのために有益であった。また、「Problem Based Learning」の職員研修の講師を務めていただいたことで、コーディネーターと教職員との連携を深めることができたうえに、教職員の文献分析の指導力も向上した。

今年度は京都市立堀川高等学校の探究発表会の視察にも同行してもらい、本校の探究活動の方針について検討できた点も有意義であった。

(オ) 高校コーディネーター研修への参加

【進捗状況】

コンソーシアム運営の知見を得るために、以下の研修に参加し、知見を得た。

・オンライン研修

7月2日（火）「高校生の学びづくりから高校コーディネーターのキャリアデザイン」

8月30日（金）「STEAM教育について」

11月14日（木）「地域学校魅力化について」

12月3日（火）「企業と高校の連携について」

・対面研修

8月8日（木）・9日（金）「プロジェクトデザイン」（桜美林大学）

10月30日（水）「システム思考とデザイン思考」（三菱UFJリサーチ&コンサルティング本社）

2月3日（月）「プロジェクト最終報告」（文部科学省）

【成果、評価・検証】

研修で知見を得たことに加え、他県の高校コーディネーターとの交流を経て、他県の高校の取組を学ぶ中で、企業との連携やコンソーシアムの連携について学ぶことができた。その知見を活かしながら、本校の「コンソーシアム運営サイクル」を構築した。そして、校内の検討だけでなく、この研修でのプロジェクト報告でサイクルについて報告し、他校のコーディネーターからも意見をもらい、サイクルをブラッシュアップできたことは有意義であった。

イ 自走可能なシステム構築

(ア) コンソーシアム運営のサイクル構築

【進捗状況】

コンソーシアム運営サイクル（3(3)アのサイクルを参照）構築と、サイクルのまわし方の振り返りについて、以下を試みた。

- ・運営委員会、サポーター会議での説明、意見交換
- ・サイクルをまわす中で気づいた問題点の集約

【成果、評価・検証】

今年度は、コンソーシアム運営サイクル③の「サポーターの効果的活用」、④の「生徒の探究の深化」に特に重点を置き、問題点をサポーター、職員と意見交換した。生徒と探究サポーターのマッチングが十分でないという課題について意見交換をする中で、以下の点を確認し、次年度の課題として設定した。

- ・外部連携をしたグループの追跡調査を行い、次年度に活かしていくこと
- ・連携しなかったグループのテーマと連携の可能性の検討

ウ 評価システム構築

(ア) 評価方法と評価基準の見直しと検討

【進捗状況】

評価方法、評価基準の見直し、検討については、以下のように行った。

- ・探究係内でのルーブリック検討（活動との紐付け）
- ・地域連携コーディネーターとの意見交換

【成果、評価・検証】

係内でテキストのルーブリックの基準について、内容の検討を行った。プログラムの活動と合致していない部分があり、評価が難しいため、プログラムの活動と合致した文言の訂正を行った。地域連携コーディネーターからも評価基準について意見をもらった。次年

度は、探究サポーターにも、ルーブリックを示し、学校が、生徒に身につけさせたい資質・能力を理解してもらいながら、協力を仰ぐことを確認した。

(イ) A i G R O W導入による客観的な評価の検証

【進捗状況】

非認知能力の「見える化」のために、自己評価、他者評価をAIで分析して、資質・能力を数値化する「A i G R O W」を導入した。年2回行うことで、1回目と2回目を比較して、本校のプログラムの検証を行う。

- | | | |
|-----------|--------------|--------------|
| ・1年生 | 1回目：4月30日（火） | 2回目：1月14日（火） |
| ・2年生（普通科） | 1回目：4月30日（火） | 2回目：1月14日（火） |
| ・2年生（理数科） | 1回目：4月30日（火） | 2回目：2月6日（木） |

【成果、評価・検証】

詳細は、3(1)エ「A i G R O Wの結果分析」に記したが、資質・能力を自己評価、他者評価を通して、数値化できたことは、次年度のプログラムを考える際に有効であった。その検証を経て、次年度は効果量の小さかった「課題設定」を意識したプログラムを考えたい。また、生徒自身も自己の振り返りと照らし合わせることで、自分の自覚した資質・能力の伸びが数値で感じられるため、自己効力感が増すことにも期待ができる。

エ 進路×探究サポートシステムの構築

(ア) 進路係との連携・進路実現のサポート体制の整備

【進捗状況】

進路係との連携・進路実現のサポート体制整備のために、以下のことを行った。

- ・探究係に進路連携担当を配置
- ・担当職員が進路係会に参加し情報共有
- ・進路行事への探究サポーター活用

【成果、評価・検証】

探究係の担当者が進路指導係会にも参加し情報共有をすることで、進路指導係と探究係の連携がスムーズにいくようになった。また、今年度より進路行事として行っている「キャリア講演会」の講師に探究サポーターを活用した。毎年、進路係の担当者が講師の選抜に苦勞し、負担になっていたものが、今年度はスムーズに講師が決定し、職員の負担軽減につながった。

(イ) 総合型選抜等の多様な入試形態の調査、共有・周知

【進捗状況】

探究活動と総合型選抜をつなげる素地を作るために、探究・進路連携の担当職員を中心に以下のことを行った。

- ・大学の入試説明会への参加
- ・『探究学習白書 2024』等の書籍で大学入試の調査
- ・ベネッセ、河合塾担当者との意見交換
- ・「探究」と「進路」を結ぶ説明プリントの作成、生徒への説明

【成果、評価・検証】

大学入試に関する情報を集める中で、それらの情報を掲載した「探究」と「進路」を結ぶ説明プリントを作成した。そのプリントを用いて説明を行った後に、探究のテーマを考えただけで、一人一人が自分の興味や進路を意識したテーマを考えることができたようになった。

(ウ) 先進的な実践校の視察

【進捗状況】

生徒の探究的な学びと総合型選抜を結び付けている実践校へ視察をして知見を得た。

- ・京都市立堀川高校 9月13日(金) 探究発表会、カリキュラム研究
- ・広島県立祇園北高校 1月30日(木) 探究×ICTを用いた総合型選抜対策
- ・広島県立広島国泰寺高校 1月31日(金) 探究発表会、総合型選抜の指導体制
- ・宮城県仙台第三高校 2月20日(木) 授業作り研究センター、SSH
- ・宮城県仙台向山高校 2月20日(木) 探究発表会、探究活動の自走

【成果、評価・検証】

職員への負担が過度に多くならないように各学校で工夫しているところを重点的に視察した。外部コンテストの利用等の工夫を学び、生徒のプレゼン能力の向上を目指すとともに、総合型選抜を中心に、生徒の進路活動に資するような探究活動への挑戦をサポートできるシステムの構築を次年度の課題に設定した。

③ 取組や成果の情報発信、普及に向けた取組

ア ミニ探究デイ 4月22日(月)

- ・1学年の「ミニ探究デイ」の各クラスの様子を発信
- ・県教育委員会、県内各校にオンラインでの発信を通知(20名参加)

イ つばさプロジェクト報告会 5月2日(木)

- ・海外研修の成果報告を全校に向けて発信
- ・WWL関係校、同窓会、サポーターに通知(15名参加)

ウ プレゼンテーションコンテスト 5月20日(月)

- ・昨年度の2年生普通科の代表グループ、理数科代表グループによるプレゼンテーションと全校による審査
- ・WWL関係校、近隣中学校、希望校、保護者にオンラインでの発信を通知(10名参加)
- ・探究サポーターへの通知(18名参加)

エ 普通科探究中間発表会 9月17日(火)

- ・2学年の探究中間発表会として生徒、教員、探究サポーターに発表、質疑応答
- ・探究サポーターへの通知(14名参加)

オ 文部科学省・三菱UFJからの視察 10月7日(月)

- ・コンソーシアムの説明、意見交換
- ・本校の探究活動についての説明、意見交換
- ・「高校コーディネーター研修」の成果報告冊子に先進実践校として紹介

カ 佐久市教育委員会主催全佐久小中校長会研修会 10月7日(月)

- ・コンソーシアムの説明、意見交換
- ・本校の探究活動についての説明、意見交換
- ・佐久地区小中学校校長への発信

キ 探究Frontiers講習における取組説明 11月11日(月)

- ・コンソーシアムの説明、意見交換
- ・本校の探究活動についての説明、意見交換
- ・研修受講者への発信(6名参加)

ク 普通科探究発表会 12月14日(土)

- ・2学年普通科34グループの成果発表

・WWL 関係校、近隣中学校、希望校、保護者に通知（92 名参加） ・学校評議員、探究サポーター、アドバイザーに通知（20 名参加）
ケ 佐久市中高「探究のあり方」検討会 1 月 21 日（火） ・コンソーシアムの説明、意見交換 ・本校の探究活動についての説明、意見交換 ・佐久市中学校、高校の探究担当者との意見交換（13 名参加）
コ 理数科課題研究発表会 2 月 1 日（土） ・2 学年理数科 9 グループの成果発表 ・ホームページで通知、近隣中学校、保護者に通知（121 名参加 オンライン参観含む）
サ その他 (ア) 学校説明会や体験入学等で広く探究活動について周知する。 (イ) 地域で行われるイベントなどに参加し、探究した成果を発表する。 (ウ) 日輪祭（文化祭）で発表ポスターの展示及び個人探究の発表の場を設ける。 (エ) 高校のホームページ上で情報を発信する。 (オ) マスコミへの取材を要請し、効果的な情報発信を行う。 (カ) 探究の成果をサポートする関係団体に送付し評価を依頼する。

(2) 校内実施体制

カリキュラム・コーディネーター氏名（ 澤田 浩文 ）（教科：国語）

実施項目	担当責任者	実施時期、学年
①新たな学習プログラムの導入、実施、検証	澤田・原口・中澤 ・清水貴・神岡	通年、1・2 学年
②ミニ探究デイ	澤田・原口・神岡	4 月、1 学年
③プレゼンテーションコンテストの運営	澤田・清水貴	5 月、2 学年
④筑波大学、JAXA、高エネルギー加速器研究機構への視察、実習	清水久・柳澤洋	7 月、1 学年
⑤フィールドワークの実施	天田・清水貴	7～9 月、2 学年
⑥信州大学教授による、理数科向け講演会	井出誠	11 月、1・2 学年
⑦佐久地域企業実習	清水久・柳澤洋	12 月、1 学年
⑧普通科探究発表会	天田・清水貴	12 月、1・2 学年
⑨理数科課題研究発表会	石間・清水久	1 月、1・2 学年
⑩海外研修	神岡・澤田	12 月・3 月 全学年
⑪外部サポーターとの連携	澤田・神岡	通年、1・2 学年
⑫コンソーシアム運営	澤田・神岡	通年
⑬各種発表会への参加	澤田・天田	通年、1・2 学年
⑭進路×探究	中澤東・御子柴	通年、全学年
⑮職員研修会	澤田・中澤東	通年、職員
⑯A i G R O W・評価関連	澤田・神岡・ 清水貴	通年、1・2 学年

(3) アドバイザー

氏名	所属・職	助言分野
草本 朋子	白馬インターナショナルスクール代表理事	探究的な学び全般に対しての助言
西田 将浩	OCES. 一般社団法人進路指	探究的な学びのカリキュラム全般

	導・キャリア教育支援機構 代表	に対しての助言
--	--------------------	---------

(4) 探究サポーター

氏名	所属・職	支援内容
桑田 てるみ	国士舘大学 21世紀アジア学部教授	図書館機能を拡充させたコラーニングスペースの設置における助言
栗津 知佳子	佐久市市民活動サポートセンター センター長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
柳澤 光宏	株式会社シナノ 代表取締役社長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
白鳥 敬日瑚	マイクロストーン株式会社 代表取締役社長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
原 啓明	長野県佐久振興局 局長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
堀内 文雄	株式会社堀内組 代表取締役	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
井出 浩司	嶋屋種苗株式会社 代表取締役社長 (元佐久市議員)	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
竹重 知幸	八十二銀行岩村田支店 支店長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
木下 史朗	木下建工株式会社 常務取締役	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
小林 一	株式会社竹花組 企画部部長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
井出 正臣	井出建設興業株式会社 代表取締役 (元佐久穂町議員)	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
武者 忠彦	立教大学コミュニティ 福祉学部 コミュニティ政策学科	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研

	教授	究開発への助言
太田 光洋	長野県立大学 健康発達学部 学部長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
草間 かおる	長野県立大学 健康発達学部食健康学科 教授・学科長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
荻原 真之	荻原医院 佐久医療センター 医師	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
宮澤 諒平	樫山工業株式会社 総務部	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
井出 太輝	EDIT COFFEE ROASTERY カフェ経営・バリスタ	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
新海 穂志也	小海薬局 薬剤師・学校薬剤師	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
岡田 信一	the OK bread & pizza パン屋経営	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
三浦 祐介	Gusk レストラン経営・シェフ	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
神津 友武	有限責任監査法人トーマツ コンサルティング	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
佐藤 奈央子	THE FLYING PENGUINS 等 フリーランス	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
黒沢 梢	佐久平女性大学 学長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」及び「政策」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
上原 幸久	上原動物病院 獣医師	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
町田 孔平	町田清法律事務所	探究的な学びの外部サポーターと

	弁護士	して、主に「政策」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
小林 隆	株式会社ビーブックス 代表取締役社長	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
井出 智也	YouTuber	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
新井 晃	株式会社ガド建築設計 事務所 代表取締役・一級建築士	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「科学技術」及び「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
塩川 いづみ	イラストレーター	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「ビジネス」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言
佐々木 博子	自営業	探究的な学びの外部サポーターとして、主に「市民活動」の観点から生徒の探究活動及び研究開発への助言

(5) 連携コーディネーター

伴野 健一	長野県教育委員会 連携コーディネーター	連携コーディネーターとして、外部サポーターの取りまとめ、生徒の探究活動及び研究開発への助言
-------	------------------------	---

(6) 実践校ごとの連絡会の実施実績（以下、敬称略）

第1回 運営委員会	
実施日・時間	9月17日（火） 16:00～17:30
参加者氏名 （所属・役職）	・株式会社堀内組 代表取締役 堀内 文雄 ・株式会社八十二銀行 岩村田支店長 竹重 知幸 ・井出建設興業株式会社 代表取締役 井出 正臣 ・教育委員会連携コーディネーター 伴野 健一 ・学校長 柳沢 敬 ・教頭 田中 聡 ・探究係主任 澤田 浩文 ・探究係 中澤 東樹
協議内容	①活動報告と意見交換 ②探究活動の普及についての意見交換 ③コンソーシアムの自走についての意見交換
第2回 運営委員会	
実施日・時間	2月4日（火） 16:00 ～ 17:30
参加者氏名 （所属・役職）	・株式会社堀内組 代表取締役 堀内 文雄 ・株式会社シナノ 代表取締役社長 柳澤 光宏 ・井出建設興業株式会社 代表取締役 井出 正臣 ・教育委員会連携コーディネーター 伴野 健一

	・学校長 柳沢 敬 ・教頭 田中 聡 ・探究係主任 澤田 浩文 ・探究係 神岡 寿賀子
協議内容	①活動報告と意見交換 ②探究活動の普及についての意見交換 ③コンソーシアムの自走についての意見交換 ④海外研修についての意見交換 ⑤佐久新校（仮称）の地域連携についての意見交換

第1回 サポーター会議	
実施日・時間	5月20日（月） 13:30～14:30
参加者氏名 （所属・役職）	長野県教育委員会 城取 恭子 伴野 健一 佐久サポートセンター 岩井 佑樹 佐々木 愛歌 株式会社シナノ 代表取締役 柳澤 光宏 マイクロストーン株式会社 代表取締役 白鳥 敬日瑚 長野県佐久地域振興局 企画振興課長 鷹野 裕司 株式会社堀内組 代表取締役 堀内 文雄 株式会社八十二銀行 岩村田支店長 竹重 知幸 株式会社竹花組 企画部部長 小林 一 井出建設興業株式会社 代表取締役 井出 正臣 荻原医院・佐久医療センター 荻原 真之 EDIT COFFEE ROASTERY 井出 太輝 THE FLYING PENGUINS 佐藤 奈央子 佐久平女性大学 学長 黒沢 梢 町田清法律事務所 町田 孔平 株式会社ビーブレックス 代表取締役 小林 隆 YouTuber 井出 智也 株式会社ガド建築設計事務所 新井 晃 自営業 佐々木 博子
協議内容	①昨年度の取組振り返りと今年度の計画についての意見交換 ②外部サポーターへのお願いと意見交換 ③佐久地域コンソーシアムについての意見交換
第2回 サポーター会議（書面・オンライン）	
実施日・時間	2月28日（金） : ~ :
参加者氏名 （所属・役職）	
協議内容	①令和6年度の事業報告と意見交換 ②令和7年度についての意見交換

(6) 項目別実施時期・期間（矢印は実施期間、①は1回目の実施、②は2回目の実施を示す）

実施項目	実施日程（月）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
①新たな学習プログラムの導入、実施、検証	←											→
②ミニ探究デイ	①											
③プレゼンテーションコンテストの運営		①							②			

④筑波大学、JAXA、高エネルギー 加速器研究機構への視察、実 習				①								
⑤フィールドワークの実施				←	→							
⑥信州大学教授による、理数科 向け講演会								①				
⑦佐久地域企業実習									①			
⑧普通科探究発表会									①			
⑨理数科課題研究発表会										①		
⑩海外研修												①
⑪外部サポーターとの連携	←											→
⑫コンソーシアム運営	←											→
⑬各種発表会への参加	←											→
⑭進路×探究	←											→
⑮職員研修会	←											→
⑯A i G R O W	①										②	

1 卓越した探究的な学びを推進する高校

○ 研究の概要

大学・研究機関等と連携して、現代の最先端の学問分野を視野に入れた卓越した探究的な学びを創造することにより、研究に対する意欲と目的意識、社会貢献に対する高い志と広い視野を育む。

【実践校 野沢北高等学校】

○ 構 想 名

SDGsを基に新たな社会や地域の創造につながる、各分野の先進的・先端的な機関との連携による卓越した探究的な学びの創出

○ 目 標

それぞれの分野をリードする佐久エリア機関との日常的な連携と、探究をさらに広め深めるためのエリア外機関との連携により、最先端を学びながら地域や社会の課題解決につながる卓越した探究活動を通して、「広い知識と教養及び未来を担う自覚」「論理的思考力と主体的課題解決能力」「情報を正しく理解し、伝え発表する力」等を備えた、未来社会の核として地域・日本・世界で活躍する人を育成する。

○ 構 想 図

